

目的 各種家庭用製品が人体皮膚に及ぼしている実態を把握するために女性を対象としたアンケート調査を1985年より実施した。

対象と方法 時期 1985-1988、各年 5月、女子学生(18-22才)とその母親(40-60才)計1861名を対象に過去1年間における家庭用製品による皮膚障害の経験の有無、その症状、原因製品などを質問紙による記入方式で調べた。学生についてはその場で記入させ、主婦は1週間の猶予期間を置いて回収した。単純集計、クロス集計により分析、考察を行なった。

結果 4年間ともに、衣料・洗剤化粧品項目に20-30%の皮膚障害を経験していることが判明した。原因と考える製品は衣料では皮膚に直接接触する下着(ナイロン、羊毛)、時計バンドに、洗浄剤は食器用洗剤洗顔剤、衣料用洗剤が多かった。衣料用品は季節による差異はなかったが、洗剤は冬期に訴え率が高く有意な差が認められた( $P < 0.05$ )。その症状は洗剤で手指がカサカサになったが多くいわゆる乾燥皮膚(dryskin)が生じていると思われる。洗剤による皮膚障害は環境も一因になっていると推察された。

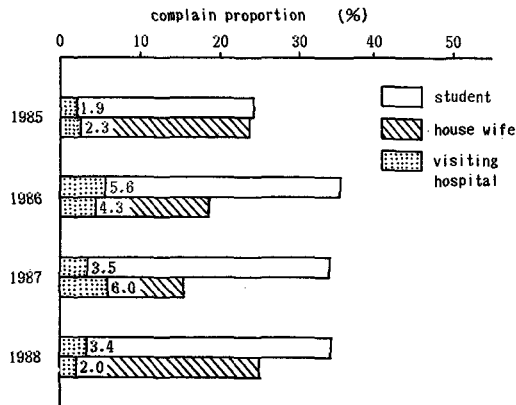


Fig.1 Complain proportion of skin disorders caused by household washes.